

寒冷は火の如く人の肉をタブラス

療養所に生きてゆくこと

阿部 安成

†

「寒冷は火の如く人の肉をタブラス」 ここには撞着がある。火の熱さと寒冷とは正反対だから、寒さや冷たさが火のように、という喩えは成り立たないはずだ。だが、ドライアイスに触ると火傷する、と注意することがあるとおり、凍傷による灼熱感、炎症や壊疽が、それを火傷とおもわせることがある。火によって爛れてしまった肉と、寒冷が爛れさせた肉とでは、どちらの糜爛がひどくみえるだろうか。

この「寒冷は火の如く人の肉をタブラス」の句のまえには、「彼の満洲の」の語があった。これが記された1936年には、すでに「満洲国」が成立している。寒冷の地という「満洲」が想起されたのだろうか 小樽よりも寒く、京城の寒さとも異なるところ、「満洲」。この句は、瀬戸内海の島にある療養所で発行された逐次刊行物に、活字を使って組まれた。1936年1月10日発行の『靈交』第206号紙上、連載稿「恩寵の花片」のなかの語句である。

このひと句を手がかりにして、わたしは、療養所の生を考えようとおもう。ここにいる療養所は、1907年公布(1909年施行)の法律第11号、いわゆる「癩予防ニ関スル件」の施行後に開設された施設を指す。日本の国土が5つの地域に分けられ、そこに1から5までのノンブルがふられた療養所が設置された。島根県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県を領域とする第4区では、香川県が療養所設立地に選ばれ、瀬戸内海の大島で第四区療養所が1909年から業務を始めた。癩を対象とした公立療養所の嚆矢である。

療養所開所から5年を経たところで、療養所内のキリスト教信徒たちが結団し、その団体は靈交会と名づけられた。靈交会はやがて、毛筆で記された手づくりの機関紙を発

信する。ついで、炭酸紙（カーボン紙）を用いた複製によりその部数が増え、寄贈された謄写版を活用してさらに部数を増やす。このとき機関紙の発行部数は100。資金を調達して印刷所に発注することにより、活版印刷の機関紙は、3倍にまでその部数が増した。もうすぐ第200号の発行をむかえる1935年5月10日発行の『靈交』第198号紙上で、こうした機関紙の歴史が、連載稿「瞑想と祈禱」で想起された。

この「瞑想と祈禱」と、冒頭に引用したひと句が記された論稿「恩寵の花片」の執筆者長田穂波は、大島の療養所に生きた療養者である。彼は、第四区療養所開設の年に大島に来て、靈交会発会の直前に洗礼をうけた、会創設者のひとりでもある。靈交会の機関紙『靈交』は、その始まりから廃刊のときまで一貫して穂波が編集していた。穂波はおそらくそのすべての号に文章を載せ、さらに島内外の逐次刊行物にも寄稿し、多数の著書を上梓した。療養所のなかで、自分の書いた文字をもっとも多く活字にしたとみてよい穂波にとって、文章を書くこととは、おもうにまかせない肉体から自由になるための手立てだったのではないか。穂波にとっては、書くという行為それ自体が容易ではなかった。手が利かない穂波は、手にくくりつけたペンを顎でささえ文字を書く。「現在は普通の万年ペンを使用して居ります」が、「手の悪い編輯子はペン執る度に、『何ぞよき自分向きの』ペンはなきかと考えさゝれる」ので、「何とかよきと思ふペンがあれば御知せ下さい」と、機関紙から読者へ呼びかけたこともあった（「編輯後記」『靈交』第192号、1934年11月10日。以下『靈交』の表示はR192_34.11.10、あるいは発行年月日のみを34.11.10と略記する）。

ペンを使って文章を書く。穂波にこれは苦行だったろうか。彼は、ペンを使って文章を書くことをとおして、社会と時局と自己の理解の仕方を示し続け、彼のペンはしばしば、自身の肉体について書きあらわした。わたしのこの習作は、穂波の内観を手がかりにして、療養所での生を考える試みである。

十十

「彼の満洲の寒冷は火の如く人の肉をタバラスと言ふ事であるが」 の文言が記さ

れた論稿「恩寵の花片」をみよう。これは、霊交会機関紙『霊交』第201号(35.8.10)から連載が始まった、三宅清泉と長田穂波の共著である。「暗黒時代」の副題がついた稿から連載が始まり、第2回と第3回の稿は「^マづまき時代」と題され、そののち副題のない稿がつづき、そして「黎明を仰ぐ」の副題がかかげられた第6回の稿にさきのひと句が登場し、全8回の連載でこの副題が最後となった。療養所事業の経験を持たない「役所」と、療養者としての「自覚」のないものたちによって動く大島の療養所では、その始まりは「暗黒」の幕開けにほかならず、やがて各宗、各派の宗教が「うづま」くときへうつり、キリスト教徒たちの活動があらわし始めた意義が示され、そして、「黎明を仰」いだかつてのようすが回顧される。

連載第6回の「黎明を仰ぐ」はその冒頭で、「戦慄すべき発病によりて、肉体と精神はボロボロに砕き尽されて、人間らしい点は全く無くなりさうに想はるゝ程の逆境に沈む」療養所での生の始まりがあらわされ、しかしそうしたなかで、「反つて平安に似た生存となるものである」と、説かれている。療養所に並存する逆境と平安 貧しきものは幸いである、の格言に似た逆理である。こうした療養所での「生存」は、そこに「落込まない者」の「普通の常識」ではわからないとの指摘で、島外の読者たちはいったん突き放されてしまう。この生とは、どのようなようすなのか。

それは、

そこには目的もない理想もない／そこには活きたくもなし死にたくもない／そこには恥と言ふ事も誉れと言ふ事もなし／そこには欲することも捨ることもない／そこには昨日も今日も明日もない／そこには時間も金銭もソロバンがない／そこには上もなく下もない／そこには東もなく西もなく方角がない

いくつもの否定形であらわされた、「『たゞの存在』が無意識的に動いて居るに過ぎない」としかあらわせない生である。この述懐をつぎへとたどると、「いたずらな呼吸がつづいてゐる」といえばこれは諦念か、「キマグレな風のやうに生きて居る」というところには詩があるかもしれない、「生の執着さえも感じてゐない、又、死なども求めては居ない。来るまゝの力に支配されてゐる」との自覚には、外部にある強力に抗わず、それ

を受忍する療養者の姿が造形されている。「冷酷な生命の海」の喩えは、療養者の集団が療養所その場所の表現なのか。この比喩が用いられた、その非情な集団が場所であっても、「虹の如くに、故郷の山河や、なつかしい面影や、こいしい思出や、腹だゝしい事や、おかしい事や、等々の影が通り魔の如くウツリては過ぎて行く」ようすが描写される。

「恩寵の花片」では、療養所にもだれもが故郷を懐かしむような、どこにでもみられるようすがある、喜怒哀楽があることも外の社会とはかわらない、そうしたなかで、否定されるべきものとしての療養者が「平安」を生きているのだ、とあらわされている、とみえるかもしれない。だが、そうとだけうけとられてしまっただけでは、まずいのだ 「清浄に洗練されし心境の如くに一寸は聞こゆるが、決して左様ではない。これは全く閉ぢ尽くした暗黒である」、ここにつづけてあの文言が記される

彼の満洲の寒冷は火の如く人の肉をタラスと言ふ事であるが、それは火の如く灰にまでする力とは異ふ如くに、諦めとか悟りとかより出し結果でなく、其の反対の諦められず悟れない結果より出でし処である。

療養者は達観などしていない、火が肉を焼きつくして灰にしてしまうように片をつけるようすとは違う、では、どう異なるのか。わたしたちは、足掻き踴っている、寒く冷たいところで肉は灰になりはしない、ただ肉が爛れるのだ、わたしたちの療養所での生は、澄み切った心境のもとでおくられているのではない、だが、そこには、「平安」がある こうした伝達が療養所から発信されたのである。

「恩寵の花片」の文章は、療養者の心境や生を、おおきく二分してとらえてみせる。「陽極」と「陰極」に分けられた前者が、「発病の結果として悟諦の靈火に洗練せられて、現や腐肉の内に光魂を尊くも包める聖者と言ふべき人」、「本当の悟諦の極に輝く人は『内に確立した生命』を持って居る、その逆境の底涙の淵より浮び上りし『識見』を有するであらふ」もの、「何物にも捕れざる強い光明」と喩えられるもの、「言行に何処となく神韻があり権威がある」、「靈光無限」、 対する後者が、「『内が暗黒の破滅である』、故に他に輝き及ぼすものがない『とらへ処なし』と言ふ態」、「言行が死悪の臭気があり投遣り的」であり、「サタンの影」がある。したがって、と言述がつづけられ、「後者は誠

にシマツに悪い、ほとんど教化の可能性さえ疑はるゝ程である。その怖るべき無血動物の如き癩者が何を為すかを思ふと、其処に療養所初代の暗影の深さがウカゞイ知らるゝのである」 連載初回の副題ともなった、療養所の「暗黒時代」が想起され、賭博が横行し、不信と裏切りに充ちた療養所生活が描かれている。

こうした事態をまえにして、各宗、各派が賭博根絶をかけた場合、この悪弊が消えてゆくとともに、「種々なる美しくしきものが芽萌え出したのであつた。此処に大島の患者生活は全く一新」した、療養所の歴史の劃期が示されたのである。霊交会も「他宗会と提携して大島改善の爲めには可成に歩調を合せて進む事」をかけた、「有神の信仰と、迷信打破と、地上浄化と、愛島の実行とに確立」したのであった。

連載「恩寵の花片」は、あらかじめ、『霊交会史』と言ふに近いもの、又、療養所の実相にも近い〔中略 引用者による。以下同〕古い思ひ出て話を載せると告げられたうえで始まっていた（「編輯後記」R200_35.7.10）。副題「黎明を仰ぐ」のついた連載第6回では、これから闇が切り開かれようとするその端緒がふりかえられている。「黎」の語には、黒いという意味がある。暁の明るさを仰ぎ、それを待ち望んだころの思い出であるとともに、消えようとする夜の闇をあらためて確かめるかのような追憶であった。その黒は「サタンの影」のあらわれだから排斥されなくてはならない。だが、その影にはまた、「自分らの過去の姿が、其処にハツキリ認めらるゝのである」から、その暗部をすべて摘出して放り捨てればよい、とはならないのである。

この「恩寵の花片」連載第6回「黎明を仰ぐ」は、どう読めばよいのだろうか。その心境を、ひいては療養者自身をも「陽極」と「陰極」とに二分し、前者が信仰の賜であり、後者はいまだそこに至らない不備や未熟や、あるいは不善とする療養者の生を描いたと読めばよいのか。連載のこの回では、「癩者の多くは陰極に於いて存在してゐる」とも報せている。「陰極」こそが癩者の多数だとなれば、たんにそのものたちを指弾する回顧とみてしまつては、この論稿を読み誤るようにおもう。必ずしも理詰めの論述ではないこの稿を読むには、それにみあった読み方が必要となる。

それにはまず、穂波が持つ二分法を解くことから始めてみよう。さきにみたとおり、

この「陰極」には自分たちの「過去の姿」も投射されている、べつに言えば、「決して他人の記事でなく、己れの記録を読み出す」ことにほかならないとの自覚があるわけだ。療養者を陰陽の二極に分化して、前者を優位におく判断を、彼はとっていない。平安と逆境、清浄と暗黒、諦めや悟りの心境とそこに到達していない反対の境地、そして、陽と陰 この二分された前項と後項が、療養所の内と外にあたるのか、後項から前項へは時間の推移とともに移行するのか、この稿はそれを明瞭に記してはいない。

† † †

「黎明を仰ぐ」と題されたこの連載第6回の稿は、全体では、療養所がうつりかわるようすを真夜中から暁へと喩えて描いている。ときはようやく黎明であり、しかもそれを仰ぐ、べつに言えば待ち望むときでもある。夜は明け切らず、世界にはまだ陽光が満ちていない。この曖昧なときは、ものごとがみえにくく、わかりづらく、世に知られず、対立や矛盾があり、そこにはいくつもの意味が籠もっているようすがうかがえる。療養所での療養者は、「平安に似た生存」であり、また「たゞの存在」であるにすぎない。きのうも、きょうも、あすもない、時間も方角もない無の世界で、欲望も毀棄もない無為を生き、恥辱も栄誉もなく目的も理想もない無我と無心とがある、とあらわされる生が穂波に自覚されている。これが、諦めでも悟りでもない平安であり、そこに郷愁や日々の感情が「影」となって「通り魔」のようにあらわれる、ともいう。

こうした穂波の内省には、強い明確な意思が1つだけあらわれている 「死にたくもない」「死なども求めては居ない」という、はっきりとした生への確信である。「活きたくもなし」「生の執着さえも感じてゐない」とも穂波は記したのだから、死をもとめない、とは積極ではない消極の、ただあるだけの生が提示されているだけだとみえるかもしれない。だが、そうではない、死なない生を穂波は確かにみすえているのである。死なない生、これは癩菌が浸潤した人体の生でもある。コレラ菌と違って、癩菌が体内で増殖してもひとは死なない。のちの穂波の死も心嚢炎による。

では、この死なない生は、なぜ、爛れてしまうのか。その生が、法のもとで隔絶され

た療養所でのみ許され、治癒や解放といった未来のない、「全く閉ぢ尽くした暗黒」にあるからなのか。ひとが当たりまえに持つふつうの感情が、療養所内では通り魔の恐怖と
感じられてしまうからか。自分の肉体も、あるいは自分の意思も存在そのものも、自己
が律するのではなく、外部にあるなにかが専制統治しているかのような療養所に隔離さ
れたからなのだろうか。わたしは、爛れてしまう死なない生の要因を、それが囲い込ま
れた場に還元して考えるのではなく、その生を駆動する肉体にもとめようとおもう。皮
膚病としての癩が、事態の根元にある。その皮膚は腐ると感じられてしまうのだ。さき
にみた、諦めや悟りの境地の前段として穂波がみた、「腐肉」がそれである。

穂波はしばしば、自分の肉体の感じ方を記録している。『霊交』紙上の「編輯後記」に
は、その号の編集を終えた穂波の安堵が記されることがある。「すこし暇になりかけた、
心がユルム」というぐあいだ(R185_34.4.10)。同時にここでは、こころ緩むせい「全
身がウツクやうに感じらるゝ」との鈍い痛みへの自覚も綴られている。全身の疼きから
の脱却は、第1に祈り、第2に勉強、第3に証言だと定め、「そして神を崇むる原稿を
ば記して活きたい。地上に何の執着もなく、久遠の生命を追ひ求めたい」との望みを
記す。ここでの穂波は、原稿を記しつづけることと信仰に生きる意思を持つこととを生
の根においている。

ただ、^{なま}生の肉体を持て余すときもある。その気持ちを穂波は、「編輯子は『近く召さ
るゝ』と言ふ気持で毎日を迎えて居ます」とあらわす。そう自覚しながらも「其処で一
生懸命につとめて居」る療養者として、「自分ながら不思議な事は、『この肉体でよくも
生きられる事』である」との驚嘆をみせ、「よく『土くれの如き』と言ふが、自分の体は
余程マツイかたまりと化して来た」と、穂波は自己の肉体を形象したのだった(「編輯後
記」R211_36.6.10)。「マツイかたまり」を抱えて生きる穂波の手立ては、「編輯子の肉
体は大分破れて来たが、内なる編輯子は益々健かである」(「編輯後記」R194_35.1.10)
と記すとおり、自己の身体を肉と内なるものに分け、後者を健全に機能させることに
ある。

穂波はいう。たとえば、「無靈魂主義者」は「精神は肉体の生氣の中に萌ゆる副産物だ」

というが、そうではなく、「実際は精神の為に、肉体が形造られつゝある事を証明」できるとの主張である（穂波生「瞑想と祈禱」R190_34.9.10） 「崩れ行く肉の所有者が、其反比例に益々精神が盛になり、死ぬる肉を超越して居る姿を、幾百の臨終実験して居る」と説くことで、さきの主張が補強される。「肉体は朽ち行くとも、精神の丈夫な者は目的を失はない、故に何かの形に於て労働があり得る」と、「土くれの如き」、あるいは、「余程マツイかたまり」であっても、確かな、健康な、達者な精神があれば労働をして生き得るとの指針を示したのである。ただしくりかえせば、その一方には、崩れゆく肉、死ぬる肉、朽ちてゆく肉体があるのだ。

身体を肉と内なるものに分ける穂波はさらに、脳の病^{やまい}と精神病とははっきりと弁別する（長田穂波「神的維新」R200_35.7.10）。穂波は現時の「精神科学」の成果として、「『精神は肉体より離れて働く』、即ち精神の独立自活と言ふ事が認められて来た」と紹介する。これをべつにいうと、「精神力は脳髓より独立なして働く」、したがって、「人間の脳味噌の熱が精神の働きなりと言ふ説は、転向して、『脳は単なる機械に過ぎず』して、他の存在が脳を用ひて居る事が明かとなつた」と説いたのである。この学説らしき議論は、どうやってその当否が確かめられたのか 穂波が大島にきてからすでに、700名ちかいものが死亡したという。これらの「死者の臨床実験」によると、「肉体の衰弱と破壊とに由りて、精神力に変化は生じないと言ふ事を確信さされたのであり、もう1つさきへ議論をすすめると、「更に大島には、精神の烈悩によりて脳をこはしたる、キチガイと言ふ症状の人が絶えないのであるが、精神の上には変化なくて、脳味噌の上に狂ひが生じて居る事を認め」たのだという。だから、「何とか為ると奥の常態である精神の姿が現れて来るのであり」、「故に『脳病』はあれども精神病ではないのであります」、これは「精神病患者に永く触れし人ならば、知る処であらふ」と、その確からしさもあわせて説かれたのだった。

ひとの身体を、その内なるものや精神と、朽ちてゆく肉体とに二分し、その肉体が衰え壊れてしまっても、精神力に変化は及ばないと説くとき、脳もまた肉体の1つの機関となり、それを患わず病と精神病とは違うというのだ。はげしい悩みを原因とする狂

気もまた脳の障害であり、精神は侵されていないとの診断である。

では、穂波にとって、自分の脳は、また、そのぐあいは、どう感じられ、どのようにあらわされたのかをみよう。

穂波は頭痛をうったえる 「頭痛の烈甚で此日頃はぬれ手拭を四六時中頂きつゝペンを執つて居」る彼には、そうしたなか、「耳は鳴る、目はかすむ、面白い事に成るものであると、肉体と言ふ機械の事を考えて居」るくらいの余裕があった（「編輯後記」R202_35.9.10）。一方このとき、「脳病めはペン執ることのものうくて原稿用紙ホゴになりけり」と、病む脳が原稿用紙を反古にするほどの物憂さをもたらしたようすをうたつてもいる（穂波生「即吟」同前）。耳鳴りや目の^{かす}翳みはおもしろくもあり、物憂くもある。頭痛が、脳の病が、そうさせるとの診察である。この頭痛は、「火気を頭上に置いて絶えず押しつけて居るやう」との激烈な苦痛と喩えられ、ひどい耳鳴りは「耳も大分遠くなつて来た」とその機能の衰えを感じさせている。ふりかえれば、「八、九年つゞけて脳を病ひ、耳も遠くなつてゐたのが、此処二、三年スツカリ気持よく、耳も能く聞えてゐた」穂波だったのだが、目と耳を、さらには脳をも患うとの実感は、「肉体のあらゆる処を犯される」との身体観となり、それゆえにまた、「負けん気でウンと働くのである」との決意にもつながるのだった（「編輯後記」R201_35.8.10）。

穂波は病む脳を生への反転軸とする 「過日来は、脳が病め^まま^まして食慾がなくなり、睡眠が出来ない事が多く、甚だユウゝツであるのですが、神を仰いで、病ひより烈しい、病ひより強い、死より勝てる、生命の賜物が確信されまして、喜びを失ひませんでした」と、脳が病んだことをとおして、病 これは癩にほからなない より強烈な生を生きようとし（長田穂波「ざんげと感謝」R203_35.10.10）他方で、「脳を病むので、起きたり寝たり致して居るので、怠気であつた」と、いくらかの慙愧をも示している（「編輯後記」同前）。恥じ入るといふ心情も、生きることをささえる。

冬の寒さがつゆのり、「海にる風が肌をさす」ころになると、「ペン持手が霜フクレで丸くなる」。だがこのころようやく「脳が快くなつた」穂波は、率直にそれを「トテモ嬉しい」とよるこんだ（「編輯後記」R205_35.12.10）。

++++

長田穂波 頭痛、耳鳴り、目の翳み、そして脳を病むという自覚 脳を患うというその様相やどあいがどのくらいなのかをひとまずおくと、それ以外はどれも、癩にのみかぎった症状ではなく、ごくふつうの日常生活でもみられる、多くのひとに覚えのあるからだの痛みや不調といってよい。こうした身体の違和を抱えて生きる穂波は、多事多忙の日々に、「健康なら善いのにアー」と願う（「編輯後記」R200_37.3.10）。穂波にとっての健康の対極は、日々のただの疾痛や調子悪さではない。それは、「脳は鳴る、瀧の如く、虫の音楽の如く、そして仕事の後は熱を持つて来る」との症状である（「編輯後記」R221_37.4.10）。この明喩であらわされたおそらく頭の痛みを、わたしたちはうまく押し量ることができない。頭痛との推断も誤っているかもしれない、脳のなんらかの病態が、そのように喩えられたのかもしれない。ともかく、脳が瀧のように鳴るのだ。

脳を病み、耳は遠く、話すことも食べることに「不自由」な口と「星が入つてとれ」ない目を持つ肉体にむかって、穂波は、「偉なる哉、癩菌！、我全身に横行する」と、まるで喝采をおくるかのように語りかけ、もう1つ、この肉体で生きられる不思議さや驚異を、「更に偉大なる哉！！、キリストの血は死屍を活して用ひ給ふ、オー我が肉よ、汝は実に奇蹟に近し」とキリストへの感謝としてあらわした。だがここで、キリストを讃えると同時に、自己の肉体を穂波は、「死屍」と表現してしまう。キリストへの賞讃が深まるほどに、穂波の肉体は死屍として爛れてゆくかのように見える。

1891年生まれの穂波は、このころ40歳代後半になっていた。老いるというには早い年齢であるものの、「私の心は元気一杯ですが、病気の方が老込で来まして、自分一個の日送りに矛盾を感じて居ります」と記すほどの実感があつたのだろうか（「編輯後記」R224_37.7.10）。病が老い込むとは、諸症状が悪化していたのか、たんに老いたと感じたのか、この表現の内実ははっきりとしない。このくだりは、やはり、肉体と心魂とを分ける自己診察を述べるところで、「心魂の^ママ^マて活ると、病者らしくなくなり、病気のやうに活ると心魂が不満に耐えません」と両者のいわば不協和について、その「^ママ^マ解結

は多分、老身は休息に入りて、若い者のみが踊る時でせう」とその落着がみとおされている。このいくらか意味のとりにくい記述を推察してみると、心魂は病に煩わされることなく生きられ、しかし病んだ肉体は毎日を過ごすことすらつらくなっているのもう休むときかもしれない、だが心魂には力が漲っているとの自覚がある、というところだろうか。

『霊交』の編集を終え疲れがでたのか、「編輯後記」には、「編輯子も大分耳を犯されて来た、脳も犯されがちである、そろそろと目も声もと来るでせう」との、愚痴とも悲嘆ともとれる感慨が記されるときもあった（R225_37.8.10）。とはいえここでも、「しかし、明日は神の愛の手に信仰するから大安心である」と、神への信頼と感謝があわせて表明されている。この信仰心がありながらもまた、ヘレン・ケラーの「非常な感覚」との対比で、「癩者は麻痺しつくしてゐる」とも書きとめられるのだった（同前）。穂波が安心して心中を表白できる『霊交』紙上の「編輯後記」は、穂波による自己のいわば診療録として活用されてきたといえる。「書いて居る腹背より汗が流れる」と夏の暑さのもとでの肉体の機能の記録に始まり、「兼ての犯されてゐる脳を初め、全身の耐暑力の減退でもあらふ」との診断に記述がうつる（「編輯後記」R226_37.9.10）。夏好きの穂波（「編輯後記」R212_36.7.10）がこう書いたのだから、このときは、かなりこたえる暑さだったのだろう。そこでこの夏は、もはや「午後の六時半にペンを捨て、井戸水を頭上よりあびるか、盥にくんで這入つて全身を洗」うことで、「格別」の「清々さ」を「いかなる時にも嬉しさは尽きぬもの」と享受している。穂波は肉体の操縦法を心得ていたらしい。

北条民雄　ここで「いのちの初夜」を参照しよう（角川文庫版、2001年改版42版、初版1955年）。「大きい反響を呼」（川端康成）んだこの北条の作品は、1936年発行の『文学界』に掲載された。「わずかに三年」と短かった北条の「文学生活」（同前）の時期は、穂波のペンが猛勢をふるっていた日々と重なる。初めは「一週間」、ついで「最初の一夜」の題で構想された作品は、「いのちの初夜」として「成熟」した（光岡良二）。

駅から病院へむかうところから、その翌日、「やがて燦然たる太陽が林のかなたに現わ

れ」るまでが、この作品のなかの時間である。病院内で「初めてまざまざと見る同病者」は、「奇怪な貌^{〔かお〕}」をしていた。病院にやってきた尾田の目をとおして、「すべてが普通の病院と様子が異なっていた」との描写がおこなわれる。そこは、「全然一般社会と切り離されている」病院だった。尾田には「話相手」の佐柄木ができた。

「どれもこれも癩^{くず}れかかった人々ばかりで、人間というよりは呼吸のある泥人形であった」との感慨を尾田が病室で抱いた場面で、佐柄木が尾田に、「あなたはこの病人たちを見て、何か不思議な気がしませんか」「つまりこの人たちも、そして僕自身をも含めて、生きているのです。このことを、あなたは不思議に思いませんか。奇怪な気がしませんか」と話しかけた、と北条は描いた。尾田には、佐柄木の顔が「半分潰れかかって、それがまたかたまつたよう」で、「話に力を入れるとひつつたように痙攣して、仄暗い電光を受けていっそう凹凸がひどく見えた」。その佐柄木は、「癩病に成りきることが何より大切だと思います」と尾田にいう。くりかえし、癩になりきる必要を説く佐柄木に尾田は、「この崩れかかった男の内部は、我々と全然異なった組織ででき上がっているのであろうか」とおもう。佐柄木はまた、「どんなに痛んでも死なない、どんなに外面が崩れても死なない」と、「癩の特徴」を説く。

「癩に屈服するのは容易じゃありません」が、「一度は屈服して、しっかりと癩者の眼を持たねばならない」、そしてくりかえし説かれる、癩になりきる、その境地をとおして、「再び人間として生き復^{かえ}る」「新しい人間生活」が、ここでは展望されている。この作品では、さきに引用したとおり、くずれかかった、の語に「癩」の文字が用いられ、病者の肉体が表現されている。それとは異なる「内部」がみつめられ、癩を潜り抜けたところに「いのちそのもの」がみとおされているのだ。

穂波にとって、そして北条においても、肉と離れたところでの、死なない生、あらたないのちの希求があった。

† † † † †

わたしのこの習作には、長田穂波による 1930 年代後半の内観をとおして、療養所の

生を考える課題があった。穂波ほどに文字を書き綴った書き手はそう多くはないので、この療養所の生を厳密に言えば、ひとまず、穂波にとっての生となる。この時期の穂波は、著述と療養所の自治と教会の運営とで忙しい毎日をおくっていた。脳の患いは、この多忙さとかかわっていたかもしれない。穂波のいう脳とは、肉体の一部であり、精神や心魂とは弁別しているとみえる。彼は身体を肉とその内なるものとに二分したうえで、癩菌に侵された肉をとおして生きるのではなく、それに蝕まれていない内なるものをとおして生きようとした。癩は皮膚の表面にすぎず、それを剥ぎ取ったところでの生である。穂波ほど多くの文字を綴らずに亡くなってしまった北条の「いのちの初夜」にも、この外面と内部とに劃然とした違いを設ける身体観と、崩れる前者から切り離れた後者に生きる生命観とがあらわされていた。穂波にとっての生は、療養所の生に広がる可能性があるのだ。

ただし、穂波にとって、この肉体と内なるものとに身体を二分することは、そう容易ではなかった。なにより、からだがいうことを聞かないのだ。穂波の身体観にしたがえば、脳もからだの一機関となり、頭痛をもたらす脳の病は精神の患いではなく、歯痛などと同じ肉体の不調である。皮膚の爛れ、そして腐肉を極限とする崩れる肉体として感じられる癩を、長田穂波というまとまりから剔抉しようにも、肉を離れた生を生きるとは現実にはむづかしい。穂波がしばしば記録したとおり、脳を病む自覚がそのたびに肉体を生きていることを彼に報せる。書きながら考え、考えつつ書く穂波には、頭痛を発する脳も、なによりペンを持つことがむづかしい手も、考えるたびに、文字を書くごとに、脳があることを手があることを自己主張しているのである。

そのうえで、自分の思索を苦心しながらもペンを使って文字にして、自己の外にそれをつくりだしたとき、肉体を飼い慣らそうとしつつ、死なない生を生きるものとして、いくらかの平安を祝福したのだろう。寒冷もまた火のようにひとの肉を爛れさせるそれは焼尽せずに燻っているようすであり、焼かれて灰になりきるのではなく爛れた状態の残余があるとの指摘であり、どうにか癩に生きる穂波がうたった凱歌の1節なのだった。